

序論

今回は3章1～7節のみことばから、「神の子どもとされた恵み」についてお話ししました。3：1の「私たちが神の子どもと呼ばれるために、御父がどんなにすばらしい愛を与えてくださったかを、考えなさい」という御言葉からはじめて、「私たちは今すでに神の子ども」とされているということを見ました。今朝はその続きになります。この箇所は、「神の子」とされるという素晴らしい恵みを受けた者たちに向けて語られた言葉です。

惑わされてはいけません

7 幼子たち、だれにも惑わされてはいけません。義を行う者は、キリストが正しい方であるように、正しい人です。

「だれにも惑わされてはいけません。」この御言葉は、今、私たちに必要なものだと思います。なぜなら、世界中に不安が広がり、多くの惑わしがある時代だと感じるからです。10月7日に、イスラエルで起きたテロ事件を発端にして、また新しい戦争が始まってしまいました。多くの人が、それを世界の終わりや終末が近いサインだと感じて、落ち着きを無くしているように見えます。ネットには、そういう情報が溢れています。

マタイ24章で、「世の終りの時のしるし」についてお語りになったとき、イエス様は確かに「戦争や戦争の噂を聞くことになる」と言われました。しかし、そこで言われているのは、「気をつけて、うろたえないようにしなさい。」「そういうことは必ず起こりますが、まだ終わりではありません。」(マタイ24：6)ということでした。また、「7民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、あちこちで飢饉と地震が起こります。8しかし、これらはすべて産みの苦しいの始まりなのです。」との言葉も、今のこの時代に当てはまるように思います。しかし、そこでイエス様言われたのは、「偽キリストや偽預言者」による惑わしに気をつけるようにということでした。もし、今が世の終わりに近づいていると思うのであれば、むしろ、私たちはこころを落ち着かせるべきです。こころの隙に付け込まれて惑わされることのないように、みことばに堅く立つ必要があります。

「悪魔のわざ」とそれを打ち破る主イエス・キリスト

8節と9節では、ある人々と別の人々とが対比されています。「悪魔から出た者」と「神から生まれた者」の対比です。両者は、特に「罪」との関わりにおいて対称的に描かれています。まず8節をお読みします。8 罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。その悪魔のわざを打ち破るために、神の御子が現れました。

「悪魔のわざ」とは、どんなものなのでしょうか？例えば、今回の戦争や災害のような酷いこと、悲惨なことで人々を苦しめるようなものも「悪魔のわざ」のひとつです。「悪魔のわざ」は、人々を苦しめ、追い詰め、破滅させるようなものです。人と人とを対立させて、孤立させて孤独にします。このままではもう終わりだと思わせて、人々から生きる希望を奪い、死へと追い込んでいくのです。「悪魔のわざ」の本質は、人の目を神から逸らさせ、人々を神様から引き離すことにあります。そして、神様の愛から引き離すこと、それが「悪魔のわざ」です。

しかし、「その悪魔のわざを打ち破るために、神の御子(イエス・キリスト)が現れました。」

イエスさまは、十字架で、私たちのために「いのち」を差し出し、私たちに「いのち」を与え、私たち

の「いのち」となってくださいました。イエスさまが、この世に來られて、十字架で死なれたのは、私たちに自身「いのち」を与えて、神様の愛のもとに立ち帰らせるためでした。そうすることで、人々を神様から引きはなそうとする「悪魔のわざ」を打ち砕かれました。十字架の死は、人の目には無意味な「敗北」にしか映りません。しかし、実際には、「悪魔のわざ」に対する、力強い「勝利」です。そして、そこに神さまの愛があらわされていました。このことについて、ヨハネはこの手紙の4：9でこう述べています。

「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって、私たちにいのちを得させてくださいました。それによって、神の愛が私たちに示されたのです。」(ヨハネ第一4：9)

私たちが神の子どもと呼ばれるために、父なる神様が与えてくださった「すばらしい愛」とは、まさにイエス・キリストの十字架によって表された「神の愛」です。

この神様の愛を受け入れずに無視しているのが、「罪を犯している者」です。彼らは本当に私たちを生かしてくださっている、いのちの源である神様ではなく、悪魔が差し出しす「偽り」を頼りにして、自分は一人でやっていけるのだと錯覚し、神さまに背を向け、神さまの愛を踏みにじっています。これが、聖書の言う「罪」です。

「神の種」

悪魔から出た者とは、正反対なのが9節で語られている「神から生まれた者」です。

9 神から生まれた者はだれも、罪を犯しません。神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。

「神から生まれた者」とは、イエス・キリストを信じて「神の子ども」とされた者たちのことです。自分が神様の前に罪ある者、つまり神様の愛にゆえず、神さまを無視して歩んできたものであることを認め、イエス・キリストの十字架の死が、自分の罪であったと認めた人たちです。

私たちは「神の子」とされた今でも、弱さや至らなさゆえに、神さまを悲しませることはあるでしょう。十戒の戒めを守ることができなくて、その意味で罪を犯してしまうことはあるでしょう。しかし9節のみことばは「神から生まれた者はだれも、罪を犯しません。」そして「その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです」と断言しています。どういうことでしょうか？これはなかなか難しいところですが、ポイントは、ヨハネが「罪を犯さない理由」、「罪を犯すことができない理由」として挙げている、「神の種がその人のうちにとどまっているから」ということです。

「神の種」とは何でしょうか？①その解釈としてまず挙げられるのは、「みことば」です。ペテロの手紙第一には、次のような御言葉があります。

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。ペテロの手紙第一 1:23

この御言葉によれば、「神のことば」は朽ちない種であり、信仰者は、その種から新しく生まれた者だということです。「神の種」を「神のことば」と解釈するなら、9節で言われていたのは、「神のことばがその人のうちにとどまっているから、罪を犯さない、犯すことができない」ということになります。

②また「神の種」とは、聖霊なる御霊であるという解釈もあります。イエス様はニコデモに対して、(イエスは答えられた。)「まことに、まことに、あなたに言います。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。」ヨハネ 3:5 と言われました。人は、御霊によって新しく生まれなければ、神の子どもとされません。

この場合、神から生まれた者が罪を犯さないのは、「聖霊がその人のうちにとどまっているから」ということになります。ガラテヤ書には、愛・喜び・平安・寛容・親切・善意・誠実・柔和・自制という、9つ

の御霊の実が記されています。

③「神の種」の解釈の3つ目は「イエス・キリスト」です。イエス様は「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたも私にとどまっていなければ、実を結ぶことはできません」（ヨハネ15：4）と語られました。また「キリストにとどまる者はだれも、罪を犯しません。」（Iヨハネ3：6）という御言葉もあります。「神の種」は、キリスト者の内にとどまって、将来的には「キリストに似た者とされる」という実を結ぶこととなります。

④そして更に4つ目を挙げると、「神の種」とは、神から与えられる「いのち」です。「種」自体が、その中に「いのち」を含んでいます。硬い殻をもった種も、土に蒔かれれば、その殻を突き破って、芽が出てきます。「種」には、いのちが宿っています。そして、将来、実を結びます。神様は、その種が成長し、ゆたかな実を結ぶことを期待して、私たちに代わらない愛を注いでくださっています。

また、いままで挙げた3つ解釈も、すべて「いのち」と関わりがあるものです。①みことばは、私たちの霊を養う「いのちのパン」です。イエス様も悪魔の誘惑を退けるときに、「人は、パンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」（マタイ4：4）と言われました。②また、聖霊は私たちにいのちを与える、「生けるいのちの水」です。イエス様は、サマリアの女に「わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちの水が湧き出ます。」（ヨハネ4：14）と言ったのは、聖霊のことでした。他にもローマ書8：6「肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です。」、8：10の「キリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、御霊が義のゆえにいのちとなっています。」など、聖霊といのちとの関わりについて述べているみことばはたくさん見つけることができます。③そして、イエス様はラザロを蘇らせたとき（ヨハネ11章）、「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」（ヨハネ11：25）と言われました。また、そもそもこの手紙が書かれた目的は、「永遠のいのちであるイエス・キリスト」を証するためでした。この手紙の書き出しは、「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。」です。ヨハネは続けてこう書いています。「このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。」

この4つ解釈は、どれか一つを選ばなければならないというのではなく、どの解釈も重なり合いながら、成立するものです。そして、どの解釈に立ったとしても、神から生まれた者＝神の子どもたちが罪から守られるのは、その人にとどまっている「神の種」によっているのです。神の子どもたちは、自分の力で罪に勝つのではなく、みことばに支えられ、御霊に生かされ、イエス様に守られて、神さまから与えられるいのちに生きることで、罪を犯さない者へと成長させられるのです。

確かに、私たちは、神の子とされた今でも、弱さを持ち、欠けがあり、また愛のなさに打ちのめされることがあります。しかし、神から生まれた私たちには、神の種が蒔かれています。みことばに養われて信仰という実を結び、御霊によって日々新たにされて御霊の実を結んでいきます。そして、頭であり、ぶどうの幹であるイエスさまからいのちをいただきながら、キリストの似姿へと変えられて行きます。

神様の目には、私たちの将来の栄光の姿が見えています。そして、罪人である私たちに期待し、今、私たちに愛を注いでいてくださいます。神様とのいのちの繋がりの中で、父子聖霊の三位一体の神様との豊かな交わりの中で、恵みによって生かされているのが、神の子どもとされた私たちの歩みです。

「律法の下」「恵みの下」

8節と9節の対比を、別のことばで言い表すなら、律法の下に生きているか、恵みの下に生きているか

という違いであると表現することもできます。自分の正しさを掲げて生きる人は、律法の下に生きている人です。その人はどんなに頑張っても、有罪にしかありません。一番大切な神さまとの関係が正しくされていないからです。悪魔がその人の目をくらませて、神さまのもとに遜ることを妨げています。

しかし、自分の罪を認め、イエス・キリストの十字架の救いを受け取り、新たに神の子どもとされて、神から生まれた者となった私たちは、もはや律法の下ではなく、恵みの下に生かされる者となりました。決して罪を軽く見て良いというわけではありませんが、もはや罪に一喜一憂する必要はなくなりました。イエス・キリストにあって、神さまとの平和を与えられた私たちと神様との間の関係は、「父と子ども」の関係になりました。すなわち、愛し愛されることが、第一とされる関係です。神の子どもとされた私たちにとって、いまや父なる神様との関係は、「愛」の関係であり、「恵み」の関係となりました。

それゆえ、私たちは、心の底から喜びと感謝を神様に捧げることができる者へと変えられ、神様の真実の愛を知る者とされ、霊と真をもって神様を礼拝する者へされました。神さまは私たちをご自分の子として、家族の中に招き、神を愛する者にしてくださいました。

もし、今弱さを覚えておられる兄弟姉妹がおられたら、試練の中で神さまに感謝を献げられない方がおられたなら、もう一度、「神さまが私たちを神の子どもとしてくださっている」ということを確認し、その愛のもとに来ていただきたいと思います。神はそのひとり子をお与えになったほどに、私たちを愛してくださいました。それは、御子を信じる者が一人として滅びることなく、永遠のいのちを得るためです。この神様のご愛は変わることがありません。今、目の前の現実がどうであろうとも、神さまは、私たちに、その真実な愛を注いでおられます。私たちは、その愛を、この身に受けて、喜びに生き、それに応答する感謝の日々へと今も招かれています。この神様に、私たちを、自分のすべてを、委ねてみませんか。そうすることができる恵みの中に、私たちは生かされています。

私たちを愛してくださっている主は、私たちが自分自身のすべてを、主にゆだね、献げることが、喜んでくださいます。そして、それが、私たちが今献げている「礼拝」です。自分のすべてを神様にお献げし、全存在を神様にお委ねするとき、私たちは霊と真をもって神様に真実の礼拝を捧げていることとなります。そして、そのようにして、自分のすべてを神様に捧げるとき、神の全き愛に、私たちは憩うことができます。神の家族であるみなさんと、これからもこの喜びをともにしていきたいと願います。これからも同じ神様を見上げて、礼拝していきましょう。

「神の子どもと悪魔の子ども」

10 節をお読みします。 10 このことによって、神の子どもと悪魔の子どもの区別がはっきりします。義を行わない者はだれであれ、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。

「このことによって、神の子どもと悪魔の子どもの区別がはっきりする」というのは、8 節と 9 節の違いによって、その区別が良く分かるということです。すなわち、8 節の「罪を犯している者は悪魔から出た者」ということと、9 節の「神から生まれた者は罪を犯さない」という、この違いですね。そしてそれは今まで見てきたように、悪魔の支配の中で、神さまの愛に応えることなく歩んでいる者と、神様の愛に応じて神を愛し、神に従って歩む者との違いです。神様との間に平和がなく、律法に縛られたままの者と、イエス・キリストの十字架の赦しを受けて恵みの下に歩んでいる者との違いです。

神のことばに養われ、聖霊に導かれて、主イエスに結び合わされた、「神の子ども」は神様との親しい交わり、愛の関係のうちで、神様のいのちに生かされています。この生ける真の神様との関係こそ、永遠のいのちです。これも、ヨハネがこの手紙の最初で語っていたことです。1：3「私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。」

そして反対に、この神様との平和、親しい交わりの中にある永遠のいのちを知らないでいるのが、「悪魔から出た者」たちです。彼らは、私たちが本当に生かす、真の神様との交わり、愛の関係を拒んでいます。彼らは、自分が頼りにし、命を預けているものが、実はあてにならない空しいものであることに気が付いていません。偽りの父である悪魔に、だまされているからです。

10節の続きには、「義を行わない者はだれであれ、神から出た者ではありません。」とあります。ここで「義を行う」と言われているのは、神様を愛して、神さまの御心に従っていくことと考えられています。それは戒めを守るという具体的な行為として、「義を行う」と表現されています、大切なのは、その人の心のうちに「神様を愛し敬う」という礼拝の心、神様への信頼の心が伴っていることです。神様は、うわべではなく、こころをご覧になるお方です。むしろ、行いではなく、その人の信仰を見て、「義」としてくださるお方です。ですから、「神から出た者」＝「神の子ども」の歩みは、神様を愛し敬う心によって行われるものとなります。

まとめ：互いに愛し合う

11 互いに愛し合うべきであること、それが、あなたがたが初めから聞いている使信です。

。「神の子ども」とされた私たちは、決して一人ではありません。イエス様がともにいてくださり、聖霊がともにいてくださるのはもちろんのこと、頭であるキリストに結ばれて、同じ神様を礼拝し同じ信仰に生きる、「神の家族」の一員とされています。今日のお話のはじめの方で、「悪魔のわざ」は、人々を孤立させ、孤独に追い込み、バラバラにしていくものだと言いましたが、それとは逆に、御霊の働きは、人々の間に神の愛を注ぎ、人と人とを結びあわせていくものです。

先週は、洗礼式が持たれ、また一人、愛する兄弟が「神の子」とされて、私たちの教会の一員に加えられました。そしてそのことを、共に喜び、お祝いすることができました。本当に嬉しい、喜びのひと時でした。誰かが救いの恵みに与るとき、私たちは他では味わうことができない不思議な喜びを覚えます。これはクリスチャンにしか味わうことができない喜びだとつくづく思います。この喜びは、私個人の喜びではなく、「神の家族」である私たち教会全体の大きな喜びです。

一人の人が救われるとき、私たちの間にどうしてこのような大きな喜びが起こるのでしょうか？ どうして私たちの心はこんなにも嬉しくなるのでしょうか？

あるとき、イエス様が「一人の罪人が悔い改めるなら、…大きな喜びが天にある」（ルカ15：7）と教えてくださいました。この喜びは「天」にも広がる喜びです。それはとりもなおさず、天に居られる父なる神様が喜んでくださっているということです。

イエス様が洗礼を受けられたとき、父なる神様は「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜び」と、その喜びを表現されました。それと同じ喜びを、神様はわたしたちにも向けてくださっています。そして、今、私たちの隣にいる神の家族のひとりひとりも、神さまが愛してやまない兄弟姉妹なのです。私たちが、「神の子」とされ、「神の家族」とされているということは、それほどに素晴らしいことなのです。

互いに愛し合うべきであること、それが、あなたがたが初めから聞いている使信です。

これからも、みなさんとともに、「神から生まれた者」として、神様を愛し、そして互いに愛し合いながら、神様の恵みの下に歩んでいきたいと願っています。

お祈りしましょう